その時　Ⅱ

くちびるからは白い綿がはみ出して見えてゐた
お前の頬に薔薇の花びらがふれ
お前のうす目がガラスのやうに光つた
白い指は鑞のやうにしつかりと組み合はせてゐた

お前はまるい樽の中に膝をまげて入つてゐた
窓からは
ポプラの並木と一本の道が見えた
ポプラの葉はひらひら小さい光を散らしてゐた

はじめてのくちづけをした日のやうに
二人が歩いて行けたらと思つた
僕は立ち上つてお前を抱いた

けれども樽のまるい感じが
樽の木の肌の荒さが
僕とお前とを残酷にへだててゐた